

## 「後葉和歌集」の「詞書」の語彙について

若林 俊英

一

本稿は、「後葉和歌集」の詞書・左注（以下、「後葉詞書」と略称する）の自立語語彙に関して、いささかまとめたものである。

「後葉和歌集」は、周知のように、為経が「詞花和歌集」に対する不満から編じたものであるが、「詞花和歌集」についての不満は為経だけではなく、撰進直後から世間一般にあったと言われている。その世間における不満の理由について谷山茂氏は、

- 1 「詞花和歌集」が歴代勅撰和歌集の中で最も小規模な撰集である
- 2 「後拾遺和歌集」以来の反古今的時流に流れすぎている

- 3 「詞花和歌集」撰集当時の歌人とその作品が必ずしも優遇されて  
いない

の各点を指摘されている。<sup>(1)</sup>

このような世間の一般的な不満とともに、為経が「後葉和歌集」を

私撰した動機として、常盤家一族の和歌に対する顕輔の態度への不満が指摘されている。<sup>(2)</sup>

筆者はかつて「詞花和歌集」の詞書・左注（以下、「詞花詞書」と略称する）について、その使用実態をみたことがあるが、本稿では、そこで得た数値等との比較を適宜行うことにより、考察を進めることにする。

詞書は、

和歌・俳句などの作者・制作の動機・日時・場所・場面・対象・目的、その他前後の事情等について記し、また作品の主題・内容等について説明を加えたもの<sup>(4)</sup>

であり、「撰者の、読者に対する享受の指示<sup>(5)</sup>」でもある。詞書のこのような機能・性格からすれば、私撰集の「後葉詞書」は、勅撰集の「詞花詞書」と差があると、当然予想される。そして、その相違は、

「千載和歌集」の詞書・左注（以下、「千載詞書」と略称する）と「新

古今和歌集」の詞書・左注（以下、「新古今詞書」と略称する）との相違とは、また異質なものである可能性もある。なぜならば、「後葉和歌集」は、「詞花和歌集」を「破る<sup>(6)</sup>」ものである。

語彙調査をするに当たつての単位語のとり方は、宮島達夫氏『古典対照語い表』（昭和四十六年九月、笠間書院）における規定をおおむね使用させていただいた。また、以下の考察をなすに当たつての底本としては、『新編国歌大観』所収の「後葉和歌集」（宮内庁書陵部蔵本を底本にし、異本からの六首を加え校訂したもの）を使用した。なお、以下、語彙数に関して、特に注記しない場合は、異なり語数とする。

## 二—(1)

「後葉詞書」の自立語語彙における異なり語数・延べ語数は、それぞれ七三三語、二七五四語であり、平均使用度数は三・七六である。これらの数値は、かつて調査した「詞花詞書」とおおむね一致するところがわかる。

表(1)は、かつて調査した勅撰和歌集の詞書・左注（以下、「詞書」と略称する）における異なり語数・延べ語数と、歌数の関係についてまとめたものである<sup>(7)</sup>。

筆者は、異なり語数・延べ語数と歌数との関係から「詞花詞書」について、

異なり語数・延べ語数の絶対数は少ないものの、質的な面では、決して他の「詞書」の語彙に劣るものではないとも言えそうであ

表(1)

作品名	歌数(A)	異なり語数(B)	延べ語数(C)	B/A	C/A
詞花詞書	420	732	2,738	1.74	6.52
千載詞書	1,285	1,257	6,999	0.98	5.45
新古今詞書	2,005	1,442	8,019	0.72	4.00
後葉詞書	596	733	2,754	1.23	4.62

る

どしたことがあるが、表(1)からすると「後葉詞書」は、異なり語数の面では「詞書」の基層語的なものと歌数との関係で、「詞花詞書」と同様、相対的にバラエティに富んでいるようにみえる数値とはなるものの、延べ語数の面では、「詞花詞書」よりもむしろ他の「詞書」に類似していると言えそうである。

## (2)

次に、「後葉詞書」の基幹語彙についてふれる。

どのような語をもって、その作品の基幹語にするかについては、様々な考え方があるが、ここでは、延べ語数の一パーミル以上の使用度数を持つ語をもって、仮に基幹語とする。

「後葉詞書」において一パーミル以上の使用度数を持つ語は、異なり語数で二〇一語、延べ語数で二一一七語となる。

この二一七語は、全延べ語数二七五四語の七六・八七パーセントに当たるが、この数値は、筆者がかつて調査した「古今和歌集」の「詞書」(以下、「古今詞書」と略称する)や「詞花詞書」での同様な数値七六・一六パーセント、七六・三三パーセントや、西田直敏氏が示された「平家物語」の基幹語彙における同様な数値七六・四パーセント、大野晋氏が示された「平安時代和文脈系文学の基本語彙」(以下、「平安和文基本語彙」と略称する)での同様な数値七九パーセントに比較的近いものである。したがって、この二〇一語を「後葉詞書」の基幹語彙とすることには、ある程度の妥当性があると考えられる。

以下の考察における基幹語彙に関するものには、この二〇一語を使用する。なお、資料として「後葉詞書」の基幹語彙を頻度順に示したので、参照願いたい。

三一(1)

次に、「後葉詞書」の基幹語彙と、大野晋氏が示された「平安和文基本語彙」とを比較し、いささかの考察を試みることにする。

表(2)は、「後葉詞書」および「平安時代和文脈系文学」の語彙を累積使用率により一〇段階に分け、「後葉詞書」の基幹語彙および「平安和文基本語彙」に関する部分だけ抜き出し、「後葉詞書」の基幹語彙をもとにして、その所属語数をまとめたものである。したがって、両語彙とも、その累積使用率からして八段階までとなる。なお、表中の「非共通語」とは、あくまでも「平安和文基本語彙」と共通し

表(2)

段 階	共通語数	「平安和文基本語彙」での段階								非共通語
		1	2	3	4	5	6	7	8	
1	2	0	0	0	0	1	1	0	0	1
2	2	0	0	1	0	0	1	0	0	2
3	6	1	2	0	2	0	1	0	0	0
4	10	2	1	0	2	4	0	0	1	1
5	13	1	1	3	1	1	2	2	2	5
6	25	0	0	0	5	8	4	7	1	4
7	48	1	4	2	4	8	10	12	7	12
8	43	0	2	2	3	6	9	13	8	27
計	149	5	10	8	17	28	28	34	19	52

ないものであって、「平安時代和文脈系文学」に存しないという意味ではないことを一言つけ加えておく。

ところで、段階分けを行った場合、どの程度の所属段階差がある語をもって特異な使用語とするかについては、慎重な検討が必要であろうが、ここでは一応二段階以上の差があるものをもって特異な使用語とする。

表(2)からわかるように、特異な使用語は、①段階二語、②段階一語、③段階二語、④段階四語、⑤段階九語、⑥段階六語、⑦段階一語、⑧段階二語の、計六五語である。

以下、具体的にそれらを示すと、

I 「後葉詞書」における所属段階の方が上位の語

「よむ(詠)」「うた(歌)」「いへ(家)」「さき(先・前)」「まかる(罷)」「つかはす(遣)」「こひ(恋)」「あそん(朝臣)」「びやうぶ(屏風)」「さつき(五月)」 (以上、一〇語)

II 「平安和文基本語彙」における所属段階の方が上位の語

「こと(事)」「ひと(人)」「みる(見)」「す(為)」「なる(成)」「あり(有)」「ひとびと(人人)」「はべり(侍)」「おはします(在)」「おなじ(同)」「まうす(申)」「よ(夜)」「かの(彼)」「ひ(日)」「たつ(立、四段)」「のち(後)」「よ(世)」「つかうまつる(仕)」「おもふ(思)」「うへ(上)」「もの(物・者)」「ゐん(院)」「おぼゆ(覚)」「こ(子)」「しのぶ(憊・忍、四段)」「いづ(出)」「かはる(変・代)」「み(身)」「みや(宮)」「なし

(無)」「また(又)」「よのなか(世中)」「はかなし(果無)」「かぜ(風)」「かた(方)」「これ(此)」「おほし(多)」「おもしろし

(面白)」「いる(入、下二段)」「すぐ(過)」「いかが(如何)」「だいなごん(大納言)」「きこゆ(聞)」「あめ(雨)」「あふ(合・逢)」「かんだちめ(上達部)」「かく(斯)」「みかど(御門)」「まつ(待)」「まへ(前)」「むすめ(娘)」「ほど(程)」「とふ(訪・問)」「ふる(降)」「とも(供・伴)」 (以上、五五語) のようになる。

以下、具体的に考察を加える。

(2)

まず、「後葉詞書」における所属段階の方が上位の語についてふれる。

ここに属するのは、前掲した一〇語であるが、これらをかたて調査した「後撰和歌集」「拾遺和歌集」の「詞書」(以下、それぞれ「後撰詞書」「拾遺詞書」と略称する)や、「詞花詞書」「千載詞書」「新古今詞書」における同様な語群と比較すると、「まかる」「つかはす」の二語がすべての作品と、「よむ」「うた」「いへ」「あそん」の四語が四作品と、それぞれ共通し、他と共通しないのは「さつき」の一語だけであることがわかった。

以下、この語群で注目すべき「こひ」「さき」について、いささかふれる。

「こひ」は、「後撰詞書」「拾遺詞書」「詞花詞書」と共通せず、「千

載詞書」「新古今詞書」と共通している。この「こひ」という語について、筆者はかつて、ある意味での時代語的要素を持ったものであるとしたが、<sup>(13)</sup>「後葉詞書」における「こひ」の頻用も同様にとらえることができるであろう。ただし、「詞花詞書」にも「こひ」の使用例が五例存する点と、<sup>(14)</sup>「後葉詞書」における一六例中一三例が「詞花和歌集」とは共通しない歌の「詞書」で使用されている点にも注意が必要であろう。

前記一三例の「こひ」の語が使用された一三首の詠者としては、  
 教長、近衛院、顯方、治部卿雅兼、僧都覺雅、親隆朝臣、為忠朝臣、基俊、三御子

などの人々をあげることができるが、これらは当代または近代の人である。

為経が「後葉和歌集」を私撰した理由の一つとして、樋口芳麻呂氏は、

詞花集が古い時代の歌人の歌を多くとつて、当代に重点をおいて  
 いないのでこれを改めようとした<sup>(15)</sup>

という点を指摘されているが、撰者為経のこのような撰集意識が、当代または近代の歌人の歌を多量に入集させ、題詠の盛行と相俟つて、<sup>(16)</sup>結果的に「こひ」の語の頻用となったとも考えられる。

次に、「さき」についてふれる。

「さき」は、「詞花詞書」と共通するものである。筆者は「詞花詞書」における「さき」の頻用について、撰者の撰集意識の反映である

うとしたが、<sup>(17)</sup>「後葉詞書」における「さき」も、「詞花詞書」での意味とは相違してはいるものの、やはり撰者為経の撰集意識の反映であると考えられる。

「後葉和歌集」も「詞花和歌集」も歌合に関する「詞書」で「さき」の用例の多くが使用されている。「詞花和歌集」で「さき」が用いられた「詞書」を持つ歌をみると、比較的古い時代の歌合でのものが中心であることがわかる。一方、「後葉和歌集」の場合は、「詞花和歌集」に入集した歌合の歌を比較的多く採った結果、古い時代の歌合の歌も多くあるが、より特徴的なことは、「詞花和歌集」では少数であった忠通が催した歌合での歌が比較的多く入集していることである。

「後葉和歌集」の撰者為経は、当代・近代を重視している。この撰集意識によって忠通主催の歌合の歌が多数入集し、結果的に「さき」の語が頻用されることになったのであろう。

以上、「後葉詞書」における所属段階の方が上位の語群についてみてきたが、ここに属する語の多くが他の「詞書」での同様な語群と共通するものであり、その意味で、「詞書」的性格の非常に強いものであることが確認できた。また、「こひ」や「さき」の頻用には、撰者為経の撰集意識の反映がみられるであろうこともわかった。

(3)

次に、「平安和文基本語彙」における所属段階の方が上位の語群についてふれる。

ここに属するのは、前掲した五五語であるが、それらをかかつて調査

した「後撰詞書」「拾遺詞書」「詞花詞書」「千載詞書」「新古今詞書」における同様な語群と比較すると、五作品と共通するものは、「なる」「あり」「おなじ」「おもふ」「もの」「なし」「ほど」「まへ」の八語、四作品と共通するものは、「こと」「ひと」「す」「ひとびと」「かの」「うへ」「み」「みや」の八語、三作品と共通するものは、「みる」「はべり」「おはします」「まうす」「よ(夜)」「ひ」「よ(世)」「るん」「いづ」「また」「かた」の一一語であり、他の「詞書」と共通しないものは、わずかに八語にすぎない。

次に、「後葉詞書」以外の五作品の「詞書」における同様な語群に属するものうち、「後葉詞書」での語群とは共通しないが、他の「詞書」相互間では比較的共通する主なものとして、「その(其)」「この(此)」「なか(中)」「みゆ(見)」「つく(付・着、下二段)」「なく(鳴・泣)」「え(副詞)」などをあげることができる。これらの語の「後葉詞書」での使用実態をみると、「その」「この」「みゆ」「つく」「なく」「え」は、基幹語彙にもならない度数<sup>(18)</sup>であり、「詞書」に使われにくいという点では、他の「詞書」における使用実態と同様で、特に問題はなからう。しかし、「なか」に関しては、少し事情が異なっている。

「後葉詞書」における「なか」の使用度数は五三で、うち「詞花和歌集」との共通歌で九例、非共通歌で四四例、それぞれ使用されている。そして、共通歌での九例中七例が、非共通歌での四四例中三五例が、「百首」または「百首(の)歌」という語句とともに用いられて

いる。このことから、「後葉和歌集」における百首歌からの多量入集が、結果的に「なか」の頻用となったことがわかる。

以上、「平安和文基本語彙」における所属段階の方が上位の語群についてみてきたが、ここには、他の「詞書」における同様な語群とも共通する「あり」「なし」「もの」「こと」「ひと」「す」など、「詞書」が本来具有する簡潔性・具体性とは対極にある語が多数所属していることがわかった。

(4)

次に、「平安和文基本語彙」とは共通しない語群についてふれる。

ここに属するのは、表(2)で示したように五二語である。この五二語は、便宜的にはあるが、

#### I 和歌関係

「うたあはせ(歌合)」「だい(題)」「ひやくしゆ(百首)」「いひつかはす(言遣)」「かきつく(書付)」「

#### II 時・時間

「にねん(二年)」「じようりやく(承暦、年号)」「よねん(四年)」「いつか(五日)」「てんとく(天徳、年号)」「くわんな(寛和、年号)」「ぐわんねん(元年)」「

#### III 人物

「だいいじゃうだいいじん(太政大臣)」「しんるん(新院)」「ほりかはるん(堀河院)」「いへなり(家成)」「だいいぶ(大夫)」「あきすけ(顕輔)」「くらんど(藏人)」「ためただ(為忠)」「でし(弟

子)」「あきすけきやう(顕輔卿)」「あきなか(顕仲)」「うだいじん(右大臣)」「くわうかもん(皇嘉門院)」「しらかは(白河院)」「すけなり(資業)」「たいくわうたいこうぐう(太皇太后宮)」「ふぢはら(藤原)」

## IV 場・場面

「だいら(内裏)」「きやうごく(京極)」「さきやう(左京)」「うぢ(宇治)」「あふみ(近江)」「かも(賀茂)」「だいきやう(大饗)」「ださい(太宰)」「はりま(播磨)」「ばう(房)」「ひえいざん(比叡山)」「ひろた(広田)」「みちのくに(陸奥国)」「みの(美濃)」「みるでら(三井寺)」

## V 題材

「おちば(落葉)」「きぬぎぬ(後朝)」

## VI その他

「おとづる(訪)」「こふ(乞)」「こもりゐる(籠居)」「なれつかうまつる(馴仕)」「まうしおくる(申送)」「まうでく(詣来)」のように分類することができる。

この分類と所属語でわかるように、ここに属するのは、和歌に関する語と、「詞書」の基本的要素である時・所・人に関する語が多い。この点において、「平安和文基本語彙」と共通しないのも首肯できるものである。また、Iに分類した諸語は、勅撰集の「詞書」とも多く共通している点からして、「詞書」を特徴づける基層的な語群であると言える。

## 四(1)

次に、「後葉詞書」の語彙における語種別、品詞別特色についてふれることにする。

表(3)は、三(1)において行ったのと同様な方法により「後葉詞書」の全語彙を段階分けし、各段階における語種別、品詞別の所属語数をまとめたものである。

以下、表(3)により、語種別、品詞別の順に、その使用実態をみる。

## (2)

まず、語種別の使用実態についてふれる。

「後葉詞書」の語彙における語種別構成比は、表(3)からわかるように、和語七六・〇パーセント、漢語二二・四パーセント、混種語二・六パーセントである。これらの数値は、「詞花詞書」と比較した場合、和語が多少低く漢語が多少高いものの、和語の数値は三代集の「詞書」でのそれより低く、「千載詞書」「新古今詞書」での数値より高いという、「詞花詞書」とおおむね同様な傾向を示している<sup>(19)</sup>。したがって、「後葉詞書」における語種別構成比は、時代が新しくなるにつれ、おおむね、和語の比率が低くなり、漢語の比率が高くなるといふ、勅撰集の「詞書」における語種別構成比の変化の枠内にあると言えそうである。ただし、他の私撰集の「詞書」は未調査であるため、「後葉詞書」の語彙における前記の傾向が特異なものであるかどうかは未詳である。この点に関しては、今後の課題としたい。

表(3)

段階	所属語数	語種別語数			品詞別語数									
		和語	漢語	混種	名詞	動詞	形容	形動	副詞	連体	接続	感動	句等	
1	3	3	0	0	2	1	0	0	0	0	0	0	0	0
2	4	2	2	0	3	1	0	0	0	0	0	0	0	0
3	6	6	0	0	5	1	0	0	0	0	0	0	0	0
4	11	10	1	0	7	4	0	0	0	0	0	0	0	0
5	18	11	6	1	11	7	0	0	0	0	0	0	0	0
6	29	27	2	0	19	8	1	0	0	1	0	0	0	0
7	60	48	10	2	38	17	4	0	1	0	0	0	0	0
8	70	56	12	2	46	18	3	0	2	1	0	0	0	0
9	105	77	25	3	79	21	2	0	1	2	0	0	0	0
10	427	317	99	11	317	82	15	6	6	0	0	0	0	1
合計	733	557	157	19	527	160	25	6	10	4	0	0	0	1
計	%	76.0	21.4	2.6	71.9	21.8	3.4	0.8	1.4	0.5	0.0	0.0	0.1	

次に、品詞別の使用実態についてふれる。

(3)

「後葉詞書」の語彙における名詞の比率は、表(3)でわかるように七一・九パーセントである。この数値をかつて調査した六勅撰集の「詞書」における数値と比較すると、<sup>(20)</sup>「後撰詞書」「詞花詞書」「古今詞書」よりも高く、「新古今詞書」「千載詞書」「拾遺詞書」に近似したものであることがわかる。また、動詞における比率<sup>(21)</sup>においても「拾遺詞書」「新古今詞書」「千載詞書」で同様な値に近似したものとっている。

形容語(形容詞・形容動詞・副詞・連体詞)における比率<sup>(22)</sup>をみると、「後撰詞書」「詞花詞書」よりも相当低く、「千載詞書」「新古今詞書」に近似したものであることがわかる。

次に、名詞および動詞の延べ語数における比率<sup>(23)</sup>をみると、名詞においては、六八・四パーセントと、「新古今詞書」(六七・二パーセント)や、「拾遺詞書」(六六・七パーセント)に比較的近似しているものの、比較した六勅撰集の「詞書」で同様な数値のどれよりも高いものとなっている。また、動詞での比率(二八・〇パーセント)をみると、やはり「新古今詞書」(二九・一パーセント)や「拾遺詞書」(二九・三パーセント)に比較的近いものの、比較した六勅撰集の「詞書」で同様な数値のどれよりも低いものとなっている。

次に、「後葉和歌集」の歌のうち、「詞花和歌集」とは共通しない歌の「詞書」に使用された語彙における名詞・動詞の比率をみると、そ

それぞれ七三・四パーセント、二一・〇パーセントとなることがわかった。これらの数値は、「後葉詞書」の全語彙における品詞別構成比での数値より、名詞においては「千載詞書」「拾遺詞書」における同様な数値に、動詞においては「拾遺詞書」「新古今詞書」における同様な数値に、それぞれより近似するものである。

以上、「後葉詞書」の語彙における品詞別構成比は、「詞花詞書」におけるそれよりも、相対的に「新古今詞書」「千載詞書」「拾遺詞書」におけるそれに近似したものであることがわかった。また、この傾向は、「詞花和歌集」との非共通歌における「詞書」の語彙において、より顕著であることもわかった。

#### 五―(1)

次に、「後葉詞書」の語彙と「詞花詞書」の語彙との共通語・非共通語について、いささか考察を加えたい。

表(4)は、三―(1)での段階分けと同様な方法により、「後葉詞書」の語彙と「詞花詞書」の語彙とを一〇段階に分け、「後葉詞書」における語彙をもとにして、その所属語数をまとめたものである。

三―(1)と同様に、二段階以上の所属段階差を持つ語をもって特異な使用語であるとする、それは、①段階一語、②段階一語、③段階二語、⑤段階三語、⑥段階一語、⑦段階二〇語、⑧段階二三語、⑨段階一五語、⑩段階一九語の、計九四語となる。

#### (2)

まず、「後葉詞書」における所属段階の方が上位の語から、その使用実態をみることにする。

前記の語は、五一語あるが、うち「後葉詞書」における使用度数が一〇以上のものとしては、「うた」「ひやくしゆ」「なか」「こころ」「こひ」「ちゆうなごん」「おなじ」とし、「じょうりやく」の九語をあげることができる。

以下、各語についていささか述べる。

「後葉詞書」における「なか」の頻用は、百首歌からの多量入集の結果であるという点については、既に述べたが、「うた」「ひやくしゆ」についても同様の理由が考えられる。また、「こひ」の頻用が撰者為経の撰集意識の結果であろう点についても、既に述べた。

次に、「こころ」についてふれる。

「心をよめる」という詞書について、井上宗雄氏は、

後拾遺集で急増し、金葉集で激増し、千載集でピークに達したかと思われる

と言われている<sup>(24)</sup>。つまり、「こころ」は、和歌史的にみた場合、「後拾遺和歌集」以後、題詠の盛行とともに増加した語であると言えよう。

したがって、「後葉詞書」において頻用されるのは、史的な流れからすれば自然なものであり、むしろ「詞花詞書」における使用度数の少なさの方が問題となるものであろう<sup>(25)</sup>。

次に、「ちゆうなごん」についてふれる。

表(4)

段階	共通語数	「詞花詞書」での段階										非共通語
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	
1	3	1	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0
2	4	0	2	1	0	1	0	0	0	0	0	0
3	6	0	2	1	1	1	1	0	0	0	0	0
4	11	0	0	4	6	1	0	0	0	0	0	0
5	18	0	0	1	2	8	5	1	0	1	0	0
6	29	0	0	0	2	6	7	5	7	2	0	0
7	56	0	0	0	0	3	10	20	6	9	8	4
8	60	0	0	0	0	0	3	17	12	9	19	10
9	82	0	0	0	0	0	3	12	11	23	33	23
10	209	0	0	0	0	0	0	6	13	45	145	218
計	478	1	5	7	12	20	29	61	49	89	205	255

「後葉詞書」における「ちゆうなごん」の度数は一四であるが、うち一〇例が「詞花和歌集」との非共通歌でのものである。その一〇例を、より具体的にみると、八例が「中納言家成家歌合」に関するものであることがわかる。また、「詞花和歌集」との共通歌での四例中三例が「中納言家成」という用例であるが、これらは「詞花詞書」においては「左衛門督家成」とするものである。

以上のような点から考えれば、当代歌人を重視した撰者為経の撰集態度により、「家成家歌合」の歌が多数採られ、その結果として「中納言」という語が頻用されたと言えよう。

次に、「おなじ」についてふれる。

「後葉詞書」における「おなじ」の使用度数は一一であり、うち九例が「詞花和歌集」との非共通歌で使用されている。この九例を具体的にみると、「同じ歌合に」「同じ歌たてまつりけるに」「同じ心を」「おなじおもひに」「おなじ品の心を」のような形で、すべて前の歌との関係の表示に使用されている。この点から考えると、「詞花詞書」と「後葉詞書」での「おなじ」の使用度数の差は、勅撰集としての「詞花和歌集」と私撰集としての「後葉和歌集」とにおける歌の配列への意識の差によるとは考えられないだろうか。

ある種の型にはまった勅撰集での歌の配列に比べ、私撰集では、勅撰集のような配慮をもしないも撰者の自由であり、特に、「後葉和歌集」においては「詞花和歌集」を破ることに重点を置いたため、<sup>(27)</sup>かえって同一撰集資料からの歌を続けるようなことになり、その結果

として「おなじ」の語を頻用することになったのであろう。

次に、「とし」をみる。

「後葉詞書」における「とし」の使用度数は一〇、うち「詞花和歌集」との共通歌で五例、非共通歌で五例、それぞれ使用されている。五首の共通歌について、「詞花和歌集」における「詞書」をみると、二首においては「とし」の語が使用されているが、他の三首中一首には「詞書」自体がなく、残りの二首には「詞書」はあるものの、「とし」の語は使用されていない。

最後に、「じようりやく」についてふれる。

「後葉詞書」における「じようりやく」の使用度数は一〇、「詞花和歌集」との共通歌で四例、非共通歌で六例、それぞれ使用されているが、これらはいずれも「内裏歌合」に関するものである。したがって、「じようりやく」という語が「後葉詞書」で頻用されているのは、「承暦の内裏歌合」の歌を多量に入集した結果であると言えよう。

以上、「後葉詞書」における所属段階の方が上位の語群をみてきたが、ここに属する語のうち、使用度数の多い語においては、撰者為経の撰集意識の反映の結果として頻用されているものが多いことがわかった。

(3)

次に、「後葉詞書」の語彙のうち、「詞花詞書」の語彙とは共通しない語についてふれることにする。

ここに属するのは、表(4)でわかるように二五五語である。この二

五五語は、

- I 「詞花和歌集」との共通歌でのみ使用される語 (二三語)
- II 「詞花和歌集」との非共通歌でのみ使用される語 (二二〇語)
- III 「詞花和歌集」との共通歌・非共通歌のどちらにも使用される語 (一二語)

の三種に分類できる。

この分類のうちIIに属する語が多いことは、当然予想されることであつたが、「詞花和歌集」との共通歌にかかわるI・IIIが、計三五語ある点は注目するであらう。

以下、I・IIIに属する語について、その使用実態をいささかみることにする。

I・IIIに属する語を、それぞれ具体的にあげると、

I 「詞花和歌集」との共通歌でのみ使用される語

「ながす(流)」「せつつ(撰津)」「すみ(炭)」「すずりばこ(硯箱)」「あんらくぎやうぼん(安樂行品)」「したふ(慕)」「うけたまはる(承)」「かりさうぞく(狩装束)」「ちやうくわん(長寛、年号)」「しきがみ(敷紙)」「おほいまうちぎみ(大臣)」「せんじふ(撰集)」「かたりつたふ(語伝)」「としごろ(年頃)」「ふぢばかま(藤袴)」「まかりわたる(罷渡)」「やきならふ(焼慣)」「ふたむらやま(二村山)」「みわ(三輪)」「よがる(夜離)」「みやうじん(明神)」「としただきやう(俊忠卿)」「はるごま(春駒)」

III 「詞花和歌集」との共通歌・非共通歌のどちらにも使用される

## 語

「くらんど(藏人)」「すぐ(過)」「のこり(残)」「なれつかうまつる(馴仕)」「まうしおくる(申送)」「あきすけきやう(顯輔卿)」「ひえいざん(比叡山)」「おもひいづ(思出)」「いひおくる(言送)」「とまる(止・泊)」「とば(鳥羽)」「むじやう(無常)」のようになる。

以上のような語が「後葉詞書」で使用され、「詞花詞書」で使用されていないのは、どのような場合なのか、以下、該当する「詞書」をいくつか具体的にあげるが、アには「後葉詞書」を、イには「詞花詞書」を、それぞれ示す。

まず、指摘できるのは、

例1 ア ……すずりばこのふたに雪をいれて… (五九)

イ ……すずりの箱のふたに雪をいれて… (三七)

例2 ア 長寛八年宇治前太政大臣家歌合に (二四二)

イ 長元八年宇治前太政大臣哥合によめる (二六四)

のように、「すずりばこ」「ちやうくわん」に対応する別語を使用した

例3 ア ……女房の中に申しおくりける (四一五)

イ ……女房の中におくり侍ける (三九九)

のように、完全には対応しないが、類語を使用することにより、「詞花詞書」での当該の語を使用しないという場合である。

次に、

例4 ア 比叡山にとしのくれぬることをよみける中に (四七四)

イ 歳暮の心をよめる (二五九)

のように、「後葉詞書」において、より具体的に記述するのに当該の語を使用したり、逆に、

例5 ア 安樂行品願成仏道の心を (五八二)

イ 舍利講のついでに、願成仏道の心を人人によませ侍ける  
によみ侍ける (四一三)

のように、簡潔に歌題を明示するのに使用する場合がある。

三番目には、

例6 ア 或人云、この歌みわの明神の御歌ども… (五七五 左注)

イ (四〇九 左注 なし)

のように、対応する「詞書」が「詞花和歌集」に存しない場合が指摘できる。

以上のほかに、様々な場合が考えられるであろうが、

例7 ア ながされ侍りけるに、はりまにて月をみて、よめる (二六六)

イ はりまにはべりける時、月みてよめる (三八八)

のような「ながす」の使用には、注意を要するであろう。

右の「ながす」は、「後葉詞書」では二例使用されているが、ここに勅撰集と私撰集との差を見いだすことができるであろう。「ながさる」という表現が、勅撰集にはふさわしくないと考えられるからである。

以上、「詞花和歌集」との共通歌でありながら「後葉詞書」においては使用され、「詞花詞書」においては使用されない語群について、その使用実態をいささかみた。それによると、「すずりばこ」と「すずりのはこ」のように、別語の使用による当該語の非使用という場合を中心に、様々な場合があることがわかった。また、勅撰集の「詞書」にはふさわしくないと考えられる語が、この語群に属していることもわかった。

## 六

次に、水谷静夫氏が示された類似度 $D'$ からみた「後葉詞書」の語彙と他の「詞書」の語彙との関係についてふれる。

表(5)は、「詞花詞書」「後葉詞書」の語彙と「古今詞書」「後撰詞書」「拾遺詞書」「千載詞書」「新古今詞書」の語彙との類似度 $D'$ をまとめたものである。

この表(5)でわかるように、類似度 $D'$ は、「後葉詞書」の語彙と「詞花詞書」の語彙とにおけるものが最も高い。「後葉和歌集」が「詞花和歌集」を批判して作られたものであるにせよ、「後葉和歌集」の四〇パーセント弱の歌が「詞花和歌集」と共通している点からみれば、当然の帰結と考えられる。

また、「後葉詞書」の語彙と「千載詞書」「新古今詞書」の語彙との類似度 $D'$ の値が、「詞花詞書」の語彙と「千載詞書」「新古今詞書」の語彙とのそれらよりも、それぞれ高い点も注目値する。

表(5)

	詞花詞書	後葉詞書
古今詞書	0.7249	0.7107
後撰詞書	0.7650	0.7479
拾遺詞書	0.7581	0.7553
詞花詞書	—	0.8869
千載詞書	0.8207	0.8313
新古今詞書	0.8123	0.8182

そして、「後葉集」は詞花集の歌をなお二百二十一首も残しており、千載集との一致歌は五十八首であるところなどから眺めると、「後葉集」はなお依然として千載集よりも詞花集の方に近いと言われているが、三作品の「詞書」の語彙における類似度 $D'$ の値は、それを裏付けるものとなっている。

以上のような点よりも、より注目値するのは、「後葉詞書」「詞花詞書」の語彙と「古今詞書」の語彙との類似度 $D'$ の値であろう。

「後葉和歌集」は、樋口芳麻呂氏も言われるように、「古今和歌集」の風雅を逸脱する傾向にある「詞花和歌集」に対して、「古今和歌集」への復帰を明らかにしようとしたものである。そして、谷山茂氏も指摘されるように、部立や詠風も「古今和歌集」に近いものがあると考

谷山茂氏は、「詞花和歌集」「後葉和歌集」「千載和歌集」の関係について、

俊成が千載集撰進にあたって義兄弟為経私撰の『後葉集』を相当に利用していることは明らかであり、『後葉集』と千載集との間にはまた少なからざる近似性が見出せるのである。

えられるものでもある。にもかかわらず、類似度D'の値からすると、「詞花詞書」の語彙と「古今詞書」の語彙の方が、「後葉詞書」の語彙と「古今詞書」の語彙よりも類似性が高くなる。これは、いかなることを意味しているのであろうか。あるいは、古い時代の評価が定まった人々の歌を重視し、当代や近代の人々の歌をあまり採らなかつた「詞花和歌集」の撰者顕輔の撰集態度が、結果的に、早い時代の勅撰集の「詞書」の語彙に類似した語彙を使用したのかもしれない。

右の点については、

I 「詞花詞書」の語彙と「後撰詞書」「拾遺詞書」の語彙との類似度D'の値が、「後葉詞書」の語彙と「後撰詞書」「拾遺詞書」の語彙とのそれよりも、それぞれ高い

II 「詞花詞書」の語彙と「千載詞書」「新古今詞書」の語彙との類似度D'の値が、当代や近代を重視した「後葉詞書」の語彙と「千載詞書」「新古今詞書」の語彙とのそれよりも、それぞれ低い

という結果が、その傍証となろう。

## 七

次に、スピアマンの順位相関係数<sup>33)</sup>によって、「後葉詞書」の語彙と他の「詞書」の語彙との関係を見ることにする。

順位相関係数を計算するに当たって、その対象とするのは、「古今詞書」「後撰詞書」「拾遺詞書」「詞花詞書」「千載詞書」「新古今詞書」

「後葉詞書」の各基幹語彙のうち共通する、以下の四九語である。

「よむ(詠)」「うた(歌)」「とき(時)」「しる(知)」「だい(題)」「つかはず(遣)」「いふ(言)」「ひと(人)」「まかる(罷)」「いへ(家)」「うたあはせ(歌合)」「す(為)」「をんな(女)」「もと(元・本・下)」「たてまつる(奉、四段)」「かへし(返)」「こと(事)」「みる(見)」「はな(花)」「はべり(侍)」「つき(月)」「ところ(所)」「あり(有)」「のち(後)」「きく(聞)」「もの(物・者)」「なる(成)」「ひ(日)」「あそん(朝臣)」「くに(国)」「とし(年)」「かへる(帰)」「あき(秋)」「ひさし(久)」「はる(春)」「まうす(申)」「やま(山)」「あふ(合・逢)」「かく(書)」「かへりごと(返言)」「あした(朝)」「おもふ(思)」「なし(無)」「おなじ(同)」「かみ(上・守)」「さくら(桜)」「まうづ(詣)」「まへ(前)」「もみぢ(紅葉)」

表(6)は、「詞花詞書」「後葉詞書」を中心にし、順位相関係数をまとめたものである。

この表(6)からわかるように、「詞花詞書」と「後葉詞書」との順位相関係数が最も高い。これについては、類似度D'に関する箇所です既述したように、「後葉和歌集」の入集歌からして当然と考えられるものである。また、「詞花詞書」の語彙と「千載詞書」の語彙との係数の低さが目につくものの、全体的には、先の類似度D'での結果と似たものとなっている。ただ、

I 「後撰詞書」に関する順位相関係数の低さ

表(6)

	詞花詞書	後葉詞書
古今詞書	0.6716	0.7332
後撰詞書	0.4118	0.3886
拾遺詞書	0.7390	0.7084
詞花詞書	—	0.8106
千載詞書	0.7051	0.8038
新古今詞書	0.7379	0.7795

ところが、表(6)でわかるように、「詞花詞書」「後葉詞書」と「後撰詞書」との順位相関係数は、他の係数と比較した場合、極端に低い。これは、いかなる理由によるのであろうか。

順位相関係数の計算の対象とした語の「後撰詞書」における順位を、他の「詞書」におけるそれと、いくつか比較してみると、三四位の「よむ」が他の「詞書」においては五位以内(「詞花詞書」「後葉詞書」とも一位)、三七・五位の「うた」が一四・五位以内(「詞花詞書」「一三・五位、「後葉詞書」二位)、一七位の「とき」が八位以内(「詞花詞書」「後葉詞書」とも八位)、四八位の「うたあはせ」が二位以内(「詞花詞書」六位、「後葉詞書」三位)、四位の「かへし」が一五位以下(「詞花詞書」三六位、「後葉詞書」三五位)、一九位の

## II 「詞花詞書」「後葉

詞書」と「古今詞書」

の係数について

の二点は、注目に値するものであろう。

まず、Iの「後撰詞書」

の順位相関係数についてふれる。

「後撰詞書」の語彙に関する類似度Dの値は、特に目立ったものではない。と

「ひさし」が二八・五位以下(「詞花詞書」四三位、「後葉詞書」四四・五位)と、はなはだしく相違していることがわかる。この相違が、「後撰詞書」に関する順位相関係数を極端なものにしたと考えられる。<sup>(34)</sup>一方、類似度Dにおいては、共通語であるかどうかの問題であり、その語の度数順位は関係がないため、順位相関係数ほど極端な数値にはならないのであろう。

次に、IIの「詞花詞書」「後葉詞書」と「古今詞書」との順位相関係数についてふれる。

「詞花詞書」の語彙と「古今詞書」の語彙との類似度Dが、「後葉詞書」の語彙と「古今詞書」の語彙とのそれよりも高い点については既にふれた。ところが、順位相関係数でみると、表(6)でわかるように、「後葉詞書」と「古今詞書」との係数が、「詞花詞書」と「古今詞書」とのそれよりも高くなる。この相矛盾したような結果は、どのように解釈すべきなのであろうか。

表(7)は、順位相関係数の調査の対象とした四九語における合計度数順位一〇位までの語と、<sup>(35)</sup>「古今詞書」「詞花詞書」「後葉詞書」における一〇語中の順位を示したものである。

この表(7)を一瞥すれば、使用度数上位語においては「後葉詞書」と「古今詞書」との方が、「詞花詞書」と「古今詞書」とよりも、順位相関が強いことがわかるであろう。<sup>(36)</sup>この点から考えれば、「後葉詞書」と「古今詞書」との係数の高さは、あるいは、

I 四九語という、限定された語での順位であり、度数の小さい語

表(7)

順位	単語	古今詞書	詞花詞書	後葉詞書
1	よむ	1	1	1
2	うた	3	8	2
3	とき	2	5	7
4	しる	6	3.5	5
5	だい	5	3.5	4
6	つかはす	9	10	10
7	いふ	8	2	6
8	ひと	4	9	8
9	まかる	7	7	9
10	いへ	10	6	3

にも存する各「詞書」の特色を示す語群が反映されていない  
 II 基幹語彙の中の、より「詞書」の基層的な語の相関の強さが、  
 より強く反映されている

などの理由によるのかもしれない。一方、類似度D'の方は、先にもふ  
 れた頭輔の撰集態度の結果による細部における類似性が、「詞花詞書」  
 の語彙と「古今詞書」の語彙との類似度D'を「後葉詞書」の語彙と  
 「古今詞書」の語彙とのそれよりも高いものにしたのであろう。

以上のように考えるならば、類似度D'での結果と矛盾するような順  
 位相関係数での結果も、首肯できるものと言えそうである。

## 八

以上、「後葉詞書」の自立語彙に関して、いくつかの観点から、  
 その使用実態をみてきたが、要点を再掲することにより、まとめとし  
 たい。

- 1 「後葉詞書」の自立語彙における異なり語数・延べ語数は、  
 それぞれ七三三語、二七五四語であり、平均使用度数は三・七六  
 となる。
- 2 延べ語数の一パーミル以上の使用度数を持つ語を基幹語とする  
 と、「後葉詞書」のそれは、異なり語数で二〇一語、延べ語数で  
 二一七語となる。また、この二一七語は、全延べ語数の七  
 六・八七パーセントに当たる。
- 3 「後葉詞書」の語彙における所属段階の方が、「平安和文基本  
 語彙」における所属段階よりも上位の、特徴的と思われる使用語  
 は一〇語あるが、これらの多くは他の「詞書」での同様な語群と  
 共通するものであり、「詞書」的性格の強いものであることがわ  
 かる。また、ここに属する「こひ」や「さき」の頻用は、撰者為  
 経の撰集意識の反映の結果であると思われる。
- 4 「後葉詞書」の語彙における語種別構成比は、勅撰集の「詞  
 書」におけるその枠内にある。
- 5 「後葉詞書」の語彙における品詞別構成比は、「詞花詞書」に  
 おけるそれよりも、相対的に「新古今詞書」「千載詞書」「拾遺詞

書」におけるそれに近似している。

6 「後葉詞書」の語彙における所属段階の方が、「詞花詞書」の語彙におけるそれよりも上位の、特徴的と思われる使用語は五一語ある。このうちの使用度数の多い語においては、撰者が経の撰集意識の反映の結果として頻用されているものが多いことがわかった。

7 「後葉詞書」の語彙と六勅撰集の「詞書」の語彙との類似度D'でみると、「後葉詞書」の語彙は「詞花詞書」の語彙との類似性が最も高いことがわかる。しかし、この結果は、「後葉和歌集」と「詞花和歌集」との共通歌の多さからして当然と思われるものである。

8 「詞花詞書」の語彙と「古今詞書」の語彙との類似度D'の値は、「後葉詞書」の語彙と「古今詞書」の語彙とのそれよりも高い。これは、「詞花和歌集」の撰者顕輔と「後葉和歌集」の撰者為経との撰集意識の差によるものと思われる。

9 順位相関係数をみると、類似度D'での結果と、おおむね同様な結果となることがわかる。

〔注〕

(1) 谷山茂氏『谷山茂著作集 三』(昭和五七年十二月、角川書店) 三九五頁～三九六頁。

(2) 樋口芳麻呂氏「詞花和歌集雑考」(『国語国文学報』五集、昭和三

〇年十二月)、(一)書、四一〇頁～四一一頁他。

(3) 拙稿a「詞花和歌集」の「詞書」の語彙について」(『城西大学女子短期大学部紀要』一〇巻一号、平成五年一月)。以下、「詞花和歌集」の詞書・左注に関しては、前掲拙稿による。

(4) 国語学会編『国語学大辞典』(昭和五五年九月、東京堂出版)の「詞書・左注」の項。

(5) 井上宗雄氏「勅撰和歌集の詞書について―主として後拾遺集と新勅撰集の場合―」(『平安朝文学研究』復刊一号、昭和五六年七月)。

(6) たとえば「和歌色葉」には、「詞花集を破たる爲経長門の後葉集」(『日本歌学大系 第三巻』昭和三一年二月、風間書房)とある。なお、(一)書、三九三頁～三九七頁参照。

(7) 拙稿b「千載和歌集」の「詞書」の語彙について」(『城西大学女子短期大学部紀要』九巻一号、平成四年一月)、拙稿c「新古今和歌集」の「詞書」の語彙について」(『湘南文学』一九号、昭和六〇年三月)。以下、「千載和歌集」「新古今和歌集」の「詞書」に関しては、それぞれ前掲拙稿による。なお、語数・比率等に関しては、調査対象範囲および読み方変更等による再調査の結果、その数値に異動がある。

歌数に関しては、異本歌を含めた各索引(後記)の本文(篇)における数をとつたので、各索引の底本そのものの歌数とは一致していないものもある。

使用した索引は、西端幸雄氏編『詞花和歌集総索引』(平成元年二月、和泉書院)、滝沢貞夫氏編『千載集総索引』(昭和五一年七月、笠間書院)、滝沢貞夫氏編『新古今集総索引』(昭和四五年八月、明治書院)。

(8) (3)拙稿a。

- (9) 拙稿 d 『古今和歌集』詞書の語彙について(『湘南文学』一七号、昭和五八年三月)。以下、「古今和歌集」の「詞書」に関しては、前掲拙稿による。なお、語数・比率等に関しては、調査対象範囲および読み方変更等による再調査の結果、その数値に異動がある。
- (10) 『平家物語の文体論的研究』(昭和五三年一月、明治書院) 八四頁。
- (11) 「平安時代和文脈系文学の基本語彙に関する二三の問題」(『国語学』八七集、昭和四六年一二月)。
- (12) 拙稿 e 『後撰和歌集』の「詞書」の語彙について(『此島正年博士喜寿記念国語語彙語法論叢』昭和六三年一〇月、桜楓社)、拙稿 f 『拾遺和歌集』の「詞書」の語彙について(『城西大学女子短期大学部紀要』八巻一号、平成三年一月)。以下、「後撰和歌集」「拾遺和歌集」の「詞書」に関しては、それぞれ前掲拙稿による。なお、語数・比率等に関しては、調査対象範囲および読み方変更等による再調査の結果、その数値に異動がある。
- (13) (7) 拙稿 b。ただし、同拙稿において「題材の変化」とした部分「題詠という、詠み方の変化」と訂する必要がある。
- (14) 「詞花和歌集」において「こひ」の語が使用された「詞書」を持つ五首の和歌のうち、四首が「後葉和歌集」との共通歌であるが、うち一首については「後葉和歌集」の方に「詞書」がない。
- (15) (2) 論文。
- (16) 「詞花和歌集」も題詠の盛行した時に撰ばれた点では「後葉和歌集」と同様であるが、撰者顕輔の恋の歌に対する尚好から、「詞花詞書」に「こひ」という語があまり使われなかったと思われる。
- (17) 「詞花和歌集」の撰者顕輔の当代・近代の歌人に対する慎重な態度が、より古い時代の歌人の歌を採ることになり、その結果として「詞書」に「さき」の語が頻用されることになったのであろう。

(3) 拙稿 a 参照。

(18) 「え」は度数一、他は度数二である。

(19) 各「詞書」における和語・漢語の語種別比率は、表(A)のようになる。

表 (A)

	和 語	漢 語
古 今 詞 書	89.0	10.0
後 撰 詞 書	87.9	10.8
拾 遺 詞 書	77.2	20.1
詞 花 詞 書	78.6	19.1
千 載 詞 書	68.0	29.2
新 古 今 詞 書	70.7	26.6

(20) (21) (22) 各「詞書」における名詞・動詞・形容語の比率は、表(B)のようになる。

(23) 各「詞書」の延べ語数における名詞・動詞の比率は、表(C)のようになる。

(24) 「心を詠める」について―後拾遺・金葉集にみられる詞書の一傾向―(『立教大学日本文学』三五号、昭和五一年二月)。

(25) 「詞花詞書」における「こころ」の語の少なさについては、未だ

表 (B)

	名 詞	動 詞	形 容 語
古 今 詞 書	68.3	24.7	6.6
後 撰 詞 書	59.4	31.0	9.2
拾 遺 詞 書	74.0	20.4	5.2
詞 花 詞 書	66.5	25.1	7.8
千 載 詞 書	73.5	19.2	6.0
新 古 今 詞 書	71.9	20.2	6.2

その理由を見出し得ていない。今後の課題としたい。(3)拙稿a参照。

(26) 松野陽一氏「平安末期私撰和歌集の研究(5)―後葉集の研究―」  
『文芸論叢』八号、昭和四七年二月。

(27) 松野陽一氏は、「平安末期私撰歌集の研究(1)―後葉・今撰・統詞花・月詠の配列と構成―」(『文芸論叢』三号、昭和四二年二月)において、「後葉和歌集」の春部の歌の配列について、「後葉集は、伝統的な構成や歌学的分類意識をもととして詞花集の配列を『破ろう』としていることが知られる。この『破ろう』という意識が、配列の有機性に破綻をきたさしめている部分の多い原因となつていよ

表 (C)

	名 詞	動 詞
古 今 詞 書	60.1	34.3
後 撰 詞 書	54.0	37.9
詞 花 詞 書	57.9	37.1
千 載 詞 書	63.7	32.6

う」と述べられている。

(28) 引用は、松野陽一氏校注『詞花和歌集』(昭和六三年九月、和泉書院)による。なお、ア、イとも、引用の後の番号は歌番号、傍線筆者。

(29) 「用語類似度による歌謡曲仕訳『湯の町エレジー』』『上海帰りのりル』及びその周辺」(『計量国語学』一二巻四号、昭和五五年三月)、『数理言語学』(昭和五七年一月、培風館)第三章「用語の類似度」、『語彙』(朝倉日本語新講座2、昭和五八年四月、朝倉書店)第五章第四節「数量化Ⅳ類による作品解析」他。

(30) (1)書、三〇七頁。

(31) (2)樋口氏論文。

(32) (1)書、四〇九頁。

(33) 田中章夫氏「語彙研究における順位の扱い」(『国語語彙史の研究

七]昭和六年一二月、和泉書院)に示されているものによつた。

- (34) 「後撰詞書」の語彙が、他の「詞書」の語彙と相違し、相対的に散文的要素が強い点については、既にふれた。(12)拙稿 e・f 他参照。

- (35) 七作品の「詞書」の全語彙における合計度数順位九位の「こころ」は、「拾遺詞書」の基幹語ではないため、この一〇語の中には入らず、一二位の「いへ」が繰り上がり、一〇語の中に入る。

- (36) 「詞花詞書」と「古今詞書」との類似度Dは〇・二六六七、「後葉詞書」と「古今詞書」とのそれは〇・三八一八となる。

(平成五年九月三〇日)



順位	単語	地名	度数
	くでう	地名	四
	くらんど	蔵人	四
	くわんな	年号	四
	ぐす	具	四
	こ	子	四
	さく	咲	四
	しのぶ	愚忍	四
	たまふ	賜	四
	ためただ	人名	四
	たゆ	絶	四
	でし	弟子	四
	なし	無	四
	はかなし	果無	四
	ひさし	久	四
	ふみつき	七月	四
	また	又	四
	まつ	松	四
	み	身	四
	みや	宮	四
	みゆき	御行	四
	やまざと	山里	四
	やよひ	三月	四
	よのなか	世中	四
	をしむ	惜	四
一六・五	あきすけきやう	人名	三
	あきなか	人名	三
	あふ	合逢	三
	あふみ	地名	三

順位	単語	地名	度数
	あめ	雨	三
	ある	或	三
	いかが	如何	三
	いる	入	三
	うだいじん	右大臣	三
	うめ	梅	三
	おくる	後	三
	おとづる	訪	三
	おほし	多	三
	おもしろし	面白	三
	かく	斯	三
	かぜ	風	三
	かた	方	三
	かも	地名	三
	かんだちめ	上達部	三
	きこゆ	聞	三
	きぬぎぬ	後朝	三
	くわうか	皇嘉	三
	もんみん	門院	三
	ぐわんねん	元年	三
	こふ	乞	三
	こもりゐる	籠居	三
	これ	此	三
	さいみん	斎院	三
	さくら	桜	三
	しぐれ	時雨	三
	しらかはみん	白河院	三
	すぐ	過	三

順位	単語	地名	度数
	すけなり	人名	三
	そち	帥	三
	そむく	背	三
	たいくわう	太皇	三
	たいこうぐう	太后宮	三
	たび	旅	三
	だいきやう	大饗	三
	だいなこん	大納言	三
	だぎい	地名	三
	つく	尽	三
	つごもり	晦日	三
	とふ	訪問	三
	とほし	遠	三
	とも	供伴	三
	ながつき	九月	三
	なくなる	無	三
	なれつかう	馴仕	三
	まつる	野	三
	の	残	三
	のこり	地名	三
	はりま	地名	三
	ばう	房	三
	ひえいざん	地名	三
	ひろた	地名	三
	ふぢはら	人名	三
	ふゆ	冬	三
	ふる	降	三
	ぶく	服	三

順位	単語	地名	度数
	ほど	程	三
	まうしおくる	申送	三
	まうづ	詣	三
	まうでく	詣来	三
	まつ	待	三
	まつり	祭	三
	まへ	前	三
	みかど	御門帝	三
	みちのくに	地名	三
	みの	地名	三
	みあでら	寺名	三
	むし	虫	三
	むすめ	娘	三